

10. 神の存在論証における「論証」:

『プロスロギオン』あるいは『神学大全』のコンテクスト。「論証」と信仰との関連性。

存在論的な神の存在論証といわれる『プロスロギオン』(第2, 3, 4章)には、第1章「神の瞑想へと精神を喚起すること」(Excitatio mentis ad contemplandum deum) という神への祈りが先行。信仰のラチオについて瞑想は彼の存在論証を論じる前提。

『プロスロギオン』の「知解を求める信仰」(fides quaerens intellectum)、あるいはそれに先立つアウグスティヌスの「信仰が尋ね、知性が見いだす」(Fides quaerit, intellectus invenit)という言葉。 → バルト神学に至るまでキリスト教神学の基礎。

自然神学はこの信仰の運動の外に存在しているのではない。

11. 「論証」(argumentum, demonstratio)とは何か。

・トマス『神学大全』第一部第二問第三項「神は存在するか」(Utrum Deus sit)。

有名な「五つの道」による宇宙論的な神の存在論証。

・それに先立つ、第一項「神在りということは自明であるか」(Utrum Deum esse sit per se notum)と第二項「神在りということは論証されうるか」(Utrum Deus esse sit demonstrabile)。

そもそも神の存在は論証を必要としているのか、あるいは論証可能なのか。

・「もっとも、これ自体としては論証され知られうるものが、その論証を理解するだけの力のない人によって<信すべき事柄>として受け取られることがあっても、それはいっこうかまわない」

13. 自然神学の議論は、自然理性によって知られる事柄を信すべき事柄として信仰に接続すると同時に、「神から啓示されうるもの」(divinitus revelabilia)を理性によって到達可能な事柄として自然理性に示すことによって、啓示・信仰と理性との間の双方向の運動が生じるべき思惟の場を構成している、それは信仰と無関係に独立して存立できるものではない。

14. 「論証」とは、一定の原理を承認する人々との間ではじめて可能になる。

・論証は原理の証明を意味するのではなく、この原理を認める者たちがその原理から導き出されるものをめぐってなされる。

15. 論証の場とその限界。

・無神論者に対して。論証ではなく、敵対者の議論の矛盾を指摘し論破すること。

・異端者(神の啓示によって与えられた事柄の一部分は認める相手)に対して。

・しかし、無神論者にとって、神の存在論証は論証としての有効性を持ち得ない。

「人間理性による論証は信仰に関する事柄を論証するには無力である」

16. 自然神学がもし何らかの説得力を有するとすれば、それは無神論者に対してではなく、異端者に対して。古代から中世、近代に至るまで、実際にはほとんど同じ信仰を共有するか少なくとも神の存在などについて部分的に見解が一致する相手が想定されていた。文字通りの無神論者が問題になるのは、啓蒙思想期以降の自然神学において。

17. 自然神学の可能性を論じる際のポイント。

①自然神学、とくに神の存在論証は信仰を前提とした思想的営みであり、啓示神学と諸科学との媒介を意図している。議論のコンテクストを構成するその信仰内容から完全に切り離してそれだけで分析されるとき、個々の論証に対して様々な論理的欠陥が指摘されるのは当然である。

②自然神学あるいは神の存在論証は信仰内容をめぐるコミュニケーションにおける合理性の確保の問題と解することができる。信仰対象である神との関係で言えば、それは祈りや讃美のコンテクストにおける信仰の表明であり、同じ信仰を有する共同体内部では信仰者各自の信仰内容の合理的表現を可能にし、信仰内容が変質し逸脱するのを防ぐ機能を果

S. Ashina

たしうる。また、信仰者自身にとっては、信仰内容の自己理解を促す。以上は信仰共同体の内部コミュニケーションであり、自然神学はその合理性の確保に関わっていることになる。次に、異端者や有神論的異教（キリスト教に対してはユダヤ教、イスラム教など）に対しては、自然神学は、論争相手がどんな原理に立っているか、またお互いが原理のどの部分を共有しているか、一致できない部分は何か、などを明確化し、その上で論証が可能な場合にはその論証の合理性を確保するのに貢献しうる。もちろん、論証が不可能な場合は、相互の論破という作業に移る。無神論者の場合も理論的には異端者や異教の場合と同様であり、こうした外部コミュニケーションにおいて自然神学のなす貢献は、共通の議論の場を明確にし、対話可能性の範囲を明示することである。いずれにせよ、現代に思想状況において自然神学の可能性を考えるときの第一のポイントは自然神学を宗教におけるコミュニケーション合理性の問題と考えうるといふ点であろう。

③しかし、繰り返すように自然神学による論証は無神論者の回心に関しては無力である。その場合、それは論証というよりも、説明ないしは告白にとどまる。論証と信仰との関係において、信仰から論証への運動はいわば自然に生じるとしても、論証から信仰への移行の方は、自然神学だけでは説明できない複雑な諸要因の存在を念頭に置く必要がある。つまり、信仰は、知的論証（知識・認識）、意志的決断、感情的関与が相互に絡まりあった一つのプロセスとして理解すべきであるように思われる。

（3）コミュニケーション合理性と宗教間対話

1. 意味の地平（経験が構成される場）の非完結性と多元性（意味の断片）

歴史の非完結性（終末以前、間の時代）

首尾一貫した連関を破る様々な断絶・溝の存在

↓

意味と理解の成立には、「地平融合」とは別の形式での関連性が存在しなければならない。

諸伝統の相互関係・対話の成立の場

意味論と終末論（終末と先取り）

2. これは、啓蒙的理性の理想に対応するものか？ 人間の生物学的条件から？

↓

形式性における普遍的前提としての言語

言語・意味は、存在論的概念である。

討論・対話の形式的条件としての語用論

ハーバーマスの普遍的語用論（Universalpragmatik）

3. 理想的発話状況（die ideale Sprechsituation、歪み無きコミュニケーション状況）の先

取り＝終末論

コミュニケーション的言語使用の四つの妥当性要求＝言語論

相互の理解、認識の共有、相互の信頼、相互の調和という相互主観的關係

理解可能性(Verständlichkeit)

真理性(Wahrheit)

正当性(Richtigkeit)

誠実性(Wahrhaftigkeit)

↓

現実のコミュニケーションの成立の場：

「相互に妥当請求を承認していることを相互に理解していること……」

つまり、無限遡及のパラドクスを内包した言語論的構造。

↓

真理とは何か：真理の合意説

4. Jürgen Habermas, *Vorlesungen zu einer sprachtheoretischen Grundlegung der Soziologie* (1970/71), in: *Vorstudien und Ergänzungen zur Theorie des kommunikativen Handelns*, Suhrkamp, 1984, S.11-126.

Nicholas Adams, *Habermas and Theology*, Cambridge Univ. Press, 2006.

Wolfgang Pauly, *Die geschichtliche Entwicklung religiöser Deutungssysteme. Die Erkenntnistheorie von Jürgen Habermas und ihre theologische Relevanz*, Saarbrücken, 1989.

Martin Jay, *The Dialectical Imagination. A History of the Frankfurt School and the Institute of Social Research 1923-1950*, Little, Brown and Company, 1973.

Stephen C. Levinson, *Pragmatics*, Cambridge University Press, 1983.

5. 多元的状况下での課題としての対話（理解の一形式）
宗教間対話：理論的解明（哲学的・神学的）と実践的手続き
ティリッヒ（芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版、1994年。）
1) 宗教現象学・宗教史学→類型論、動的類型論
・比較という作業：三位一体論の位置（多神教、一神教、三一神教的一神教）
Systematic Theology. vol.1, 218-230.

↓

- ・比較を通じた理解の深化：キリスト教と仏教との比較・対話
 - (1) 相違：神の国と涅槃、政治的共同体の象徴と個人的存在論的象徴
倫理と神秘主義 cf. ヒック：人格／非人格
 - (2) キリスト教における存在論的神秘主義的要素の発見
 - (3) 宗教経験の類型論から要素論へ、そして構造論へ。
 - ・対話をめぐる諸問題
 - (1) 対話の条件：*Christianity and the Encounter of the World Religions*, 1963.
(Paul Tillich. *Main Works*, 5), p.313
- 対話の名に値する対話であるために
- (a) 相互に相手の宗教の価値を承認し合うこと。固有の真理性をもつ相手。
 - (b) 対話の当事者がそれぞれの宗教を代表していること。自らの宗教に対する確信と説明能力。
 - (c) 共通基盤 (common ground) の存在。 cf. common basis：統合の基盤
 - (d) 相手の批判に開かれていること。
- (2) 対話の意義（何のための対話か？）あるいは動態
対話を媒介とした自己理解の深化
cf. 内省による自己理解＝現象学と外部を媒介した自己理解＝解釈学

↓

自己と他者の動的連関

理解と批判の媒介

他者と批判を経由する自己理解

→自己のユニークさは実態論的な出発点ではなく、対話の過程で発見され、構成されるもの（＝課題としての自己、自己に「なる」）。

- (3) 対話の主体

個人／共同体／思想 → 科学と宗教の対話の場合
 公式の教会組織との関わりを持ちつつ、その周辺で
 解放の神学、あるいはキリシタンの場合
 基礎的共同体（Pieris, the basic communities）
 組・講（狭間芳樹「近世における民衆と宗教——キリシタンと一向宗」、
 芦名定道編『比較宗教学への招待』晃洋書房）
 現代日本、現代の東アジアでは？
 スピリチュアリティ・個人主義以降の共同性
 ↓
 個人と共同体との関係性についての理論構築が必要。
 人格と共同性（再び、ティリッヒでは、個別性と参与の両極性）
 イデオロギーとユートピア

<参考文献>

1. 芦名定道『自然神学再考——近代世界とキリスト教』晃洋書房、2007年。
2. A・E・マクグラス『科学と宗教』教文館、2003年。
 『「自然」を神学する——キリスト教自然神学の新展開』教文館、2011年。
3. A・S・マクグレイド編『中世の哲学 ケンブリッジ・コンパニオン』
 京都大学学術出版会、2012年。
4. E・グラント『中世における科学の基礎づけ——その宗教的、制度的、知的背景』
 知泉書館、2007年。
5. Dieter Henrich, *Der Ontologische Gottesbeweis. Sein Problem und seine Geschichte in der Neuzeit*, J.C.B.Mohr, 1967.
6. Horst Seidl (Hrsg.), *Die Gottesbeweise in der "Summe gegendie Heiden" und der "Summe der Theologie". Text mit Übersetzung, Einleitung und Kommentar. Lateinisch-Deutsch (PhB 330)*, Felix Meiner Verlag, 1982(1996).
7. Alvin Plantinga, *The Nature of Necessity*, Clarendon, 1974.
8. John Hick, *An Interpretation of Religion*, Yale Univ. Press, 1989.

1. 自然神学とその歴史的展開

1－3：自然神学と自然学・自然科学

(1) 古代科学・中世科学

1. 自然学、古代ギリシャからキリスト教世界へ
 古代ギリシャの自然学（古代科学）→東ローマ帝国→ペルシャ帝国→イスラーム世界
 →中世ヨーロッパ世界（イベリア半島など。平和的共存と軍事的接触）
 12世紀ルネサンス、13世紀中世科学・スコラ：修道院から大学へ
2. 十字軍における軍事的接触とは別の経路・別の交流
 イベリア半島における三宗教共存（寛容の文化）の一つの可能性
 哲学（アリストテレス）、科学（自然学）、建築、文学（11世紀のイスラームにお
 ける愛の伝統が、トゥルバドゥールの発生を刺激した。ロマンティック・ラブの成立
 （伊東、1993、227-270）の相互交流。レコンキスタによって終焉。
3. イスラーム科学：8世紀のアッバース革命、この王朝の下でのイスラーム科学（8世
 紀から15世紀）の黄金時代（8世紀から11世紀は西欧科学を圧倒、12世紀からラテン

世界へ流入)、アラビア語による科学。イラン人、トルコ人、ユダヤ人など。

4. 12世紀ルネサンスの開始：大翻訳運動、アラビア語からラテン語へ

「十二世紀ルネサンスの知的回復運動の中心となったところはどこかと言えば、それは一貫してスペインとイタリアであった」「北東スペイン学派」「トレード学派」「北イタリア学派」(伊東、1978、220)、「北東スペイン学派」「カタロニア」「ピレネー山脈かエブロ河に至る」、「近代西欧科学の知的源泉をたどるならばほとんど、この中世ルネサンスの知的所産にゆきつく」(233)

↓

13世紀以降の西欧中世の科学的発展

5. 二つの書物、啓示神学と自然神学：神についての知識の獲得に関わる二つの道

- ・ 神の啓示、とくに聖書テキストに基づく神学＝啓示神学

- ・ 人間の自然的理性（理性本性）の能力による神認識＝自然神学

創造論 → 世界は神の被造物、その中には人間理性が理解可能な合理的な秩序・法則が存在する（知恵思想）。

→ 科学的探究は神の偉大な創造行為を讃美する宗教的に意義ある行為（以下引用の詩編19編を参照）

→ 自然科学の基本前提

自然の合理性と人間理性による理解可能性

6. 「世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物において現れており、これを通して神について知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。」(ローマの信徒への手紙1.20)

「2 天は神の栄光を物語り／大空は御手の業を示す。3 昼は昼に語り伝え／夜は夜に知識を送る。4 話すことも、語ることもなく／声は聞こえなくても 5 その響きは全地に／その言葉は世界の果てに向かう。そこに、神は太陽の幕屋を設けられた。」(詩編19編)

7. 自然神学：世界の秩序の探求から神へ

神の存在論証

(a) 存在論的類型：アンセルムス、デカルト、ヘーゲル

(b) 宇宙論的類型：トマス（5つの道）、ニュートン、人間原理

- ・ 経験的事実から神へ（因果律、目的論）

- ・ 運動・変化の存在／「原因—結果」の連鎖／第一原因

→これを神と呼ぶ

8. 中世の統一的な知の世界（神の創造した合理性の客観化）

神学（啓示神学）／神学（自然神学）／哲学／自然学・諸科学

自然神学は知的世界の統合の要の位置にある。

9. 宗教的行為としての科学研究

「私はこれを発表しようと思います。自然という書物の中において認められることを望みたもう神の栄光のために。……私は神学者になるつもりでした。私の心は長い間落ち着きませんでした。しかし今こそ、天文学においても、神に栄光を帰することができたのです。」(ケプラー「メストリン教授宛の書簡」)

(2) ガリレオ裁判とは何か

1. ガリレオ裁判を「宗教と科学との関係史」の観点から見る。

宗教と科学の対立図式は19世紀(1880年代)の産物である。ラッセル『西洋哲学史』

S. Ashina

2. 最近のガリレオ研究（芦名定道『宗教学のエッセンス』北樹出版、176-177頁）によって、以上の単純な対立図式の事例としてのガリレオ事件という見方は大きく修正されてきている。
3. カルヴァン『創世記注解』における「適応の原理」(principle of accommodation)
「モーセは、常識ある普通人の誰しものが教えられなくても理解できるような事柄を平易な文体で記述した。しかし天文学者は、人間精神の賢明さが理解できる限りの事柄を苦勞して探求する。しかしながら、この研究は神に見捨てられるべきものではなく、また、この科学を、自分の知らない事柄は何でも勝手に退けようとする血迷った人々がいるという理由で非難すべきではない。なぜならば、天文学は、喜びを与えるだけでなく、その知識は有用だからである。この学問が神の驚くべき知恵を示すということは否定できない。……モーセは、学識ある人々のみならず、無学で無教養な人々をも教える教師として定められているのであるから、こういうきめの粗い教え方をするところまで身を低めなければその役割を果たすことができなかつたのである。」
(John Calvin, Commentaries on the First Book of Moses called Genesis (translated by the Rev. John King, M.A.) volume First, The Edinburgh Printing Company 1847, p.86)
4. では、どうしてガリレオ裁判は避けられなかつたのか。カトリック教会はなぜ天動説に固執したのか。→プロテスタント的新解釈に対して、伝統的解釈を防衛する。

(3) 科学革命とキリスト教

1. マートン・テーゼ：キリスト教（とくにプロテスタント・ピューリタニズム）は近代科学の形成に積極的かつ実質的な寄与を行った。王立協会の初期のメンバーの多くはピューリタンの信仰の持ち主であった。
2. 穏健な王制・国教会体制を擁護するという機能を有するいわばイデオロギーとしての科学。ニュートンとニュートン主義者は、最新の科学的知見（新科学）によって、無神論的思想傾向を含む論敵（右と左の）たちを合理的に論駁することを目指した。

(4) ニュートンとニュートン主義の自然神学

1. 17世紀までの多くの科学者にとって、自然探究は、神の創造の偉大さを讃美すること（＝宗教的業）であり、ニュートン科学は、無神論論駁という意図と結びついていた。新しい科学的知識は、伝統的世界観への批判を通じて伝統的なキリスト教への批判として機能できただけでなく（理神論、唯物論、無神論）、この同じ新科学によるキリスト教の擁護論（＝ニュートン主義）も可能であった。
2. ニュートン研究の進展 → ニュートンの知的世界の全貌
自然科学／自然哲学／自然神学／歴史神学／聖書解釈
3. 「この至高の存在者は、宇宙靈魂(anima mundi)としてではなく万物の主(universorum dominus)としてあらゆる事物を統治する。そしてその支配のゆえに、主なる神(dominus deus)、パントクラートルと呼ばれるのが常である。というのも、神とは相対的な呼び名であって、それは僕(servus)に関連しているからである。そして神性とは、神を宇宙靈魂とする者が夢想するような、神の支配が神自身の身体におよぶことなく、僕におよぶことだからである。」（『プリンキピア』総注）
4. 『プリンキピア』の神学
 - ①パントクラートルあるいは主という言葉遣い、あるいは神の統治や支配の強調
 - ②無神論論駁のための神の存在論証
「この太陽、惑星、彗星の壮麗きわまりない体系は知性的で力ある存在の思慮と支配か

ら発した以外には考えることができない。」(ibid., p.760)

伝統的な自然神学における「意図(デザイン)からの神の存在論証」

③自然哲学とその神学的根拠

自然哲学的前提は、さらにその根拠を知性的で力ある神の支配にもつのである。

5. 二つの自然哲学：機械論的と錬金術的。錬金術者ニュートン。

機械論的自然哲学：物体、もの。受動的な自然（外力なしに運動状態は変化しない）

錬金術的自然哲学：生命、物質。能動的な自然

6. ニュートンの歴史研究とキリスト教史・聖書解釈

近代は、科学がイデオロギーとしての機能を発揮するようになった時代

伝統的宗教を弁護するために科学

7. 主なる神の支配とその秩序（自然と歴史の全体）

↓

知的巨人ニュートンの思想世界

自然研究：数学・物理学（『プリンキピア』）→近代科学、機械論的世界観

重力・光学

物質論、錬金術（アニミズム的世界観）

歴史研究：聖書解釈

古代のキリスト教思想研究

古代年代記研究

8. 「神の支配」による諸領域の統合、無神論を論駁するための科学

8. イデオロギーとしての自然神学・自然科学。デザイン神学(Design Theology)

1) 世界における見事な秩序・法則

2) 偶然ではない

3) デザイナーとしての神の存在

9. ボイル講演：ニュートンの弟子たち（ベントリー、デラム、クラークら）の活躍。

↓

イギリス自然神学の伝統

10. イギリスの社会システムをいかにソフトランディングさせるかという問題

絶対王政と表裏一体の国教会

穏健な国教会（広教主義）・穏健なピューリタン：ニュートン主義

ラディカルな反国教会主義・共和制：新しい科学に基づく唯物論

<参考文献>

1. 芦名定道 『自然神学再考——近代世界とキリスト教』 晃洋書房。
2. 伊東俊太郎 『近代科学の源流』 中央公論社、『一二世紀ルネサンス』 岩波書店。
3. マーガレット・ジェイコブ 『ニュートン主義とイギリス革命』 学術書房。
4. フランク・E. マニユエル 『ニュートンの宗教』 法政大学出版局。
5. ウェストホール 『アイザック・ニュートン I、II』 平凡社。
6. 河辺六男編 『ニュートン』 中央公論社。
7. ギンガリッチ、マクラクラン 『コペルニクス』 大月書店。
8. 伊東俊太郎 『ガリレオ』 講談社。
9. 伊藤和行 『ガリレオ——望遠鏡が発見した宇宙』 中公新書。